

直前慶大文学部小論文



出典：オリジナル問題（文章出典 野家啓一『物語の哲学——柳田國男と歴史の発見』）

解答

設問Ⅰ

過去の出来事は「描写」されるのではなく想起的に「構成」される。これは単に現在の知覚状況を描写する「体験を話す」とこと、ある種の規範的意味が込められた「経験を語る」ことの区別から明らかであろう。一度限りの個人的な体験は物語行為によって我々の信念体系の中に組み込まれ意味づけられて経験となる。大森荘蔵の言うように私たちは過去を知覚することはできず想起することしかできない。つまり過去の体験は経験を語る物語行為から独立には存在し得ないのだ。だから裁判で被告と原告の証言の違いが生じて、それは両者の想起の対立であり、事実と想起の対立ではない。たとえそこに物的証拠があろうと、それは「過去の痕跡」であり、想起とは独立に同定される客観的過去ではなく、想起を通じて語られる「過去物語」の一要素に過ぎないのである。

設問Ⅱ

課題文を読み、私が思い出したのは高校の修学旅行で沖縄を訪れたことである。国内唯一の地上戦の舞台となった沖縄戦については、事前学習である程度の理解をしていたつもりだった。しかし戦争経験者の老人たちから直接聞いた話は、やはりショックだった。彼らの中で戦争は終わっていないのだと思った。

私たちは過ぎ去った過去を知覚することはできず、ただ想起することができるだけなのだ。いや私たちが想起しなければ過去は存在しないのだ。けれども個人的に想起するだけでは十分ではないのだろう。積極的に物語ることがなければ、過去は存在しても個人の胸の中に止まり、いずれ消えていってしまう。物語行為のもつ「構造化」と「共同化」という働きこそが、過去を過去として活かし、現在の私たちの行為に指針を与え、規範的な意味を持つ経験となるのだ。

戦争経験者が徐々に消えていく現在、私たちはかつて戦争があったという過去を語り継ぐ使命があるのだと思う。

慶應義塾大学文学部の出題は、課題文・設問指示・文字数の全てにおいて、ここ数年でたびたび変化している。また、設問Ⅰについては〈要約〉と〈説明問題〉の二通りの出題パターンがあるが、どちらの場合であっても「課題文の内容を読みとり、まとめる」という基本姿勢は同じである。

要約（説明問題）と意見論述の両方の出題を想定し、どちらの対策も進めておくことが必須である。

【参考】過去の設問形式

二〇〇四年	…六〇〇字～八〇〇字の意見論述（単独設問）
二〇〇五年	…三〇〇字～四〇〇字程度の内容に関する読解（要約）と、四〇〇字程度の意見論述（二問構成）
二〇〇六年	…一〇〇字、四〇〇字の説明問題（二問）※意見論述の出題なし
二〇〇七年～二〇〇九年	…一八〇字～二〇〇字の説明問題と、四八〇字～五二〇字の意見論述（二問構成）
二〇一〇年	…二二〇字～二八〇字の説明問題と、三四〇字～四四〇字の意見論述（二問構成）
二〇一一年	…一八〇字～二〇〇字の説明問題と、四〇〇字～五〇〇字の意見論述（二問構成）
二〇一二年～二〇一四年	…三〇〇字～三六〇字の説明問題と、三二〇字～四〇〇字の意見論述（二問構成）

●設問要求●

まず設問文そして課題文をしっかり読み、

設問Ⅰ 「筆者の考え方の筋道がわかるように」という要求に留意して課題文を要約する（三五〇字以内）。

設問Ⅱ 「過去の体験は、経験を語る物語行為から独立には存在し得ないとする筆者の見方を考慮したうえで」という要求に留意して、「過去を語ることについて」論述する（四〇〇字以内）。

注意 あらゆる教科の試験に言えることであるが、

①設問文を読み、その要求を押さえる（設問の分析）こと。

●課題文を読む●

しかし、課題文が提示されている以上、課題文の筆者の主張を肯定するにせよ、否定したり、疑問を呈するにせよ、またいかに自由に論じることが求められていようと、正確な課題文の読解が前提になることは言うまでもない。課題文の正確な理解が無ければ、いかに構想・構成に見るべきものがあるうと、その論は致命的な欠陥を背負うことになる。

●設問文を検討・分析する●

3

の筋道に沿って)まとめることが要約の王道である。その意味で「筆者の考え方の筋道がわかるように」という要求は私たちに原則通りの要約を求めているのだ、と考えればよい。

設問Ⅱでは「過去の体験は、経験を語る物語行為から独立には存在し得ないとする筆者の見方」と「過去を語ること」の二つがポイントになっていることが分かる。設問で要求していることが課題文において枝葉末節であるはずはあるまい。ということは先の設問Ⅰの全文要約の際に、この設問Ⅱの二つのポイントは欠くことのできない要素であろうことは想像がつくはず。他教科(特に現代文など)もそうであろうが、各設問をつながりて捉える姿勢が大切であることは言うまでもない。

●課題文の分析・読解●

この課題文の長さは過去の慶應義塾大学文学部小論文の課題文としてはやや短めの出題事例に近い。引用文を含め全体で十一の形式段落で構成されている。課題文の読みに入る前にまず課題文全体に段落番号を振っておくことを勧める。課題文はただダラリと文章が広がっているのではなく、いくつかのブロック(本課題文であれば十一個のブロック)で構成されているのである。そのことが目に見える形でわかるだけでも、心が落ち着くはずである。課題文がノッペラボウな文章の広がりと感じられることと、そこにいくつかの筋目が入っていることを比べてみればよい(これは現代文における問題文でも同じ)。

課題文の形式段落に番号を振ることなど造作もないことである。是非、実行することを勧める。

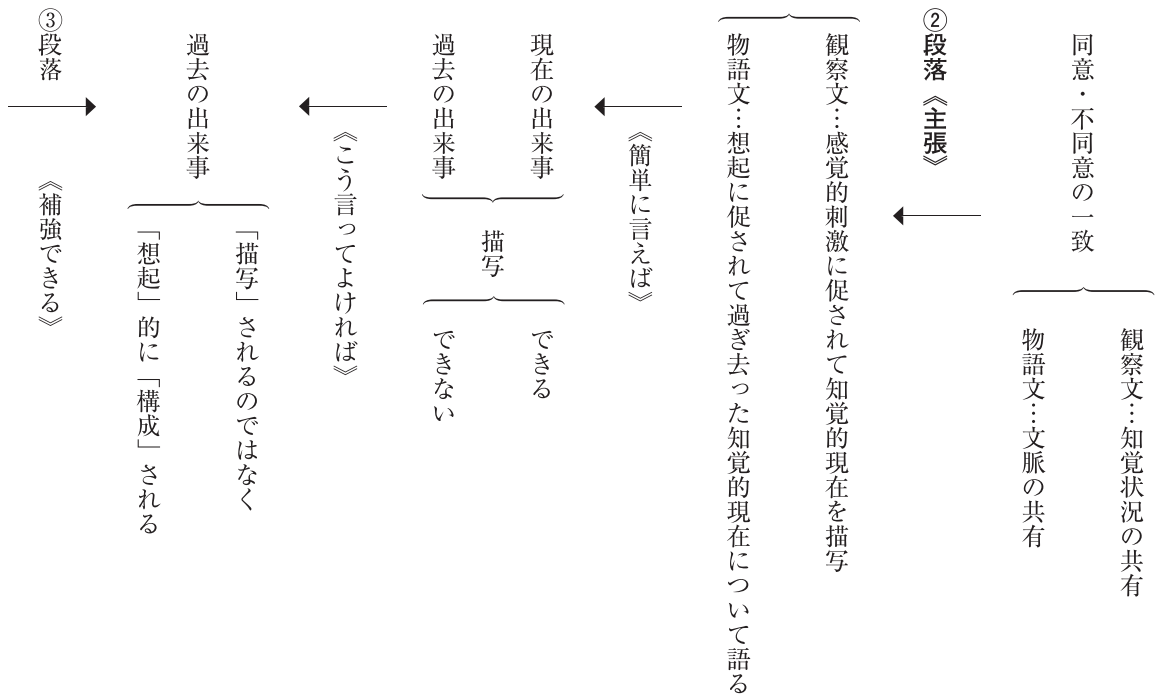
以下、形式段落に従って、課題文の流れを追いかけていこう。

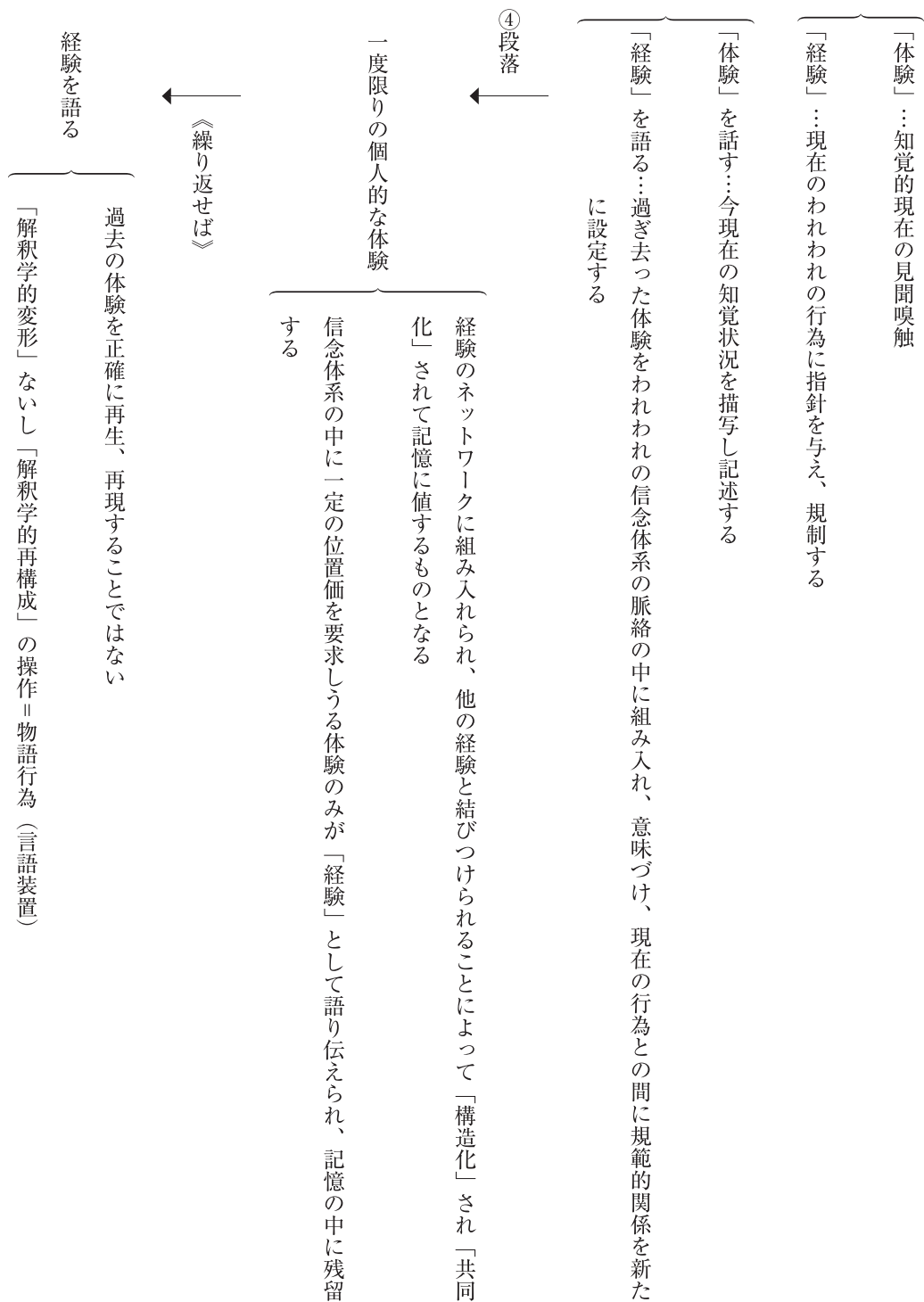
①段落《前提》

物語行為によって語られる事柄

フィクション

過去の経験と歴史





《言い換えれば》

「体験」——「物語」——「経験」

⑤段落

《過去や歴史にも適用できる》

常識：過去の出来事は主観的な活動

想起

語る

から独立に客観的に実在する

《疑い・異をとなえる》

大森莊蔵の「想起過去説」

⑥段落

《引用》

想起とは過去の知覚を再現・再生することではない

⑦段落

《解説》

過去＝想起されること

《すなわち》

過去は想起という経験様式から独立に存在し得ない

知覚
想起
||
体験
経験

《言い換えれば》

経験を語る

過去の体験を再生・再現することではなく

過去の体験は経験を語る物語行為から独立には存在し得ない

《反論》

⑧段落

想起と過去の同一視は、過去の客観的実在性を否定する乱暴な説

《むしろ逆》

⑨段落

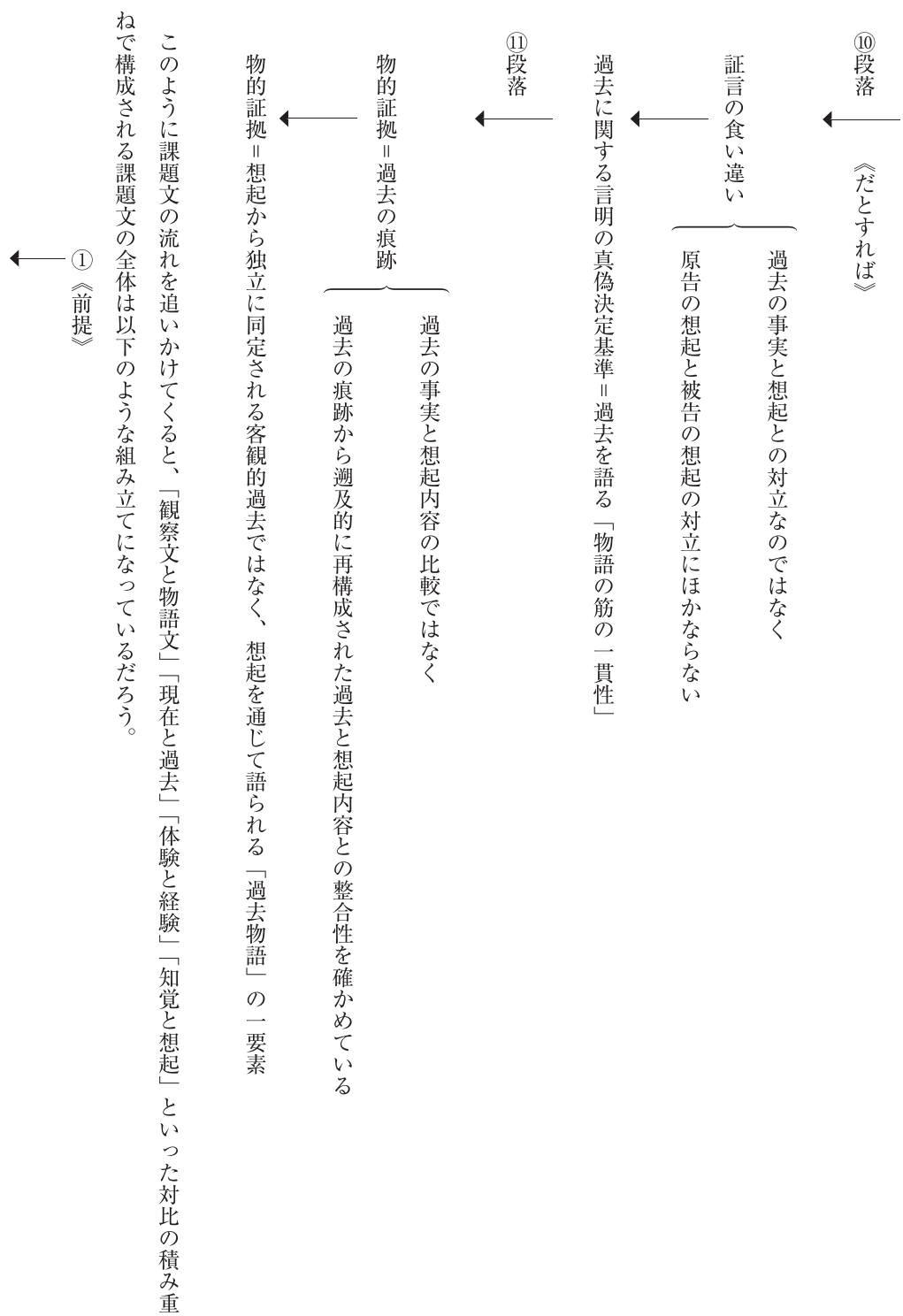
《例えば》

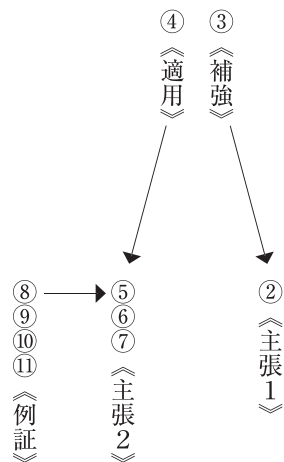
裁判における被告と原告の証言の食い違い

「過去の事実」を今現在この場で知覚することはできない

「過去の客観的事実」では決められない

大森「過去想起説」|| 想起は過去の「写し」ではなく、むしろ過去そのもの





●問題へのアプローチ●

《設問Ⅰ》

解答の手順

- ① 課題文の筆者の主張・結論（言いたいこと）をまず押さえる。
- ② それを着地点にして筆者がどのように論じていったか、論述の流れを押さえる。
- ③ 以上のことを箇条書きなどにして、その関係を把握する。
- ④ 指定字数に留意しながら、拾うべき要素と捨てるべき要素を決める。
- ⑤ 以上の作業に基づき、分かりやすい表現（一文が長くなりすぎないようになど）に注意しながら記述する。
- ⑥ 要約問題であるので（三五〇字という字数は微妙だが）、段落分け（冒頭一字下げ）は不要と判断する。

解答のポイント

前項の「課題文の分析・読解」の最後にあるように、課題文の筆者の主張は②段落と⑦段落に現れている。それを中心にしてその主張を支えるようにして述べられている事柄を前後に拡げるようなつもりで拾っていけばよい。

- (イ) 「過去の出来事は『描写』されるのではなく『想起』的に『構成』される」という主張があること。

《設問Ⅱ》

- (ロ) 「過去の体験は経験を語る物語行為から独立には存在し得ない」という主張があること。
- (ハ) 前記の主張を補強し支える要素として
- ① 「体験」と「経験」の区別という要素があること。
- ② 「過去を知覚することはできず想起することしかできない」(大森説)という要素があること。
- (二) 「過去の客観的事実」「物的証拠」への言及部分(第⑨段落以降)が要素としてあること。

解答の手順

- ① 「過去の体験は、経験を語る物語行為から独立には存在し得ないとする筆者の見方を考慮したうえで」という設問の要求を確認する。
- ② それは課題文⑦段落にあり、そこでは「想起と知覚」が「体験と経験」の区別に重ねられていることを押さえる。
- ③ さらに「物語行為」について課題文中の説明を押さえる。
- ・ 物語文と観察文との相違(①段落)
 - ・ 物語行為Ⅱ体験を経験へと解釈学的に変形し再構成する言語装置(④段落)
 - ・ 物語行為Ⅱ孤立した体験に脈絡と屈折を与え、新たに意味つける反省的な行為(④段落)
 - ・ 物語行為のもつ「構造化」と「共同化」という働き(④段落)
- ④ 以上の作業から、自分が「過去を語る」ということについて何か気づくことはないか、ラフに考え、メモする。
- ⑤ メモの中から、論じるに値するもの、論じるだけの材料があるものを検討し、論点を決定する。
- ⑥ 段落分け(冒頭一字下げ)を忘れないようにする。指定字数は四〇〇字なので原則として二～三段落構成とする。

解答のポイント

「筆者の見方を考慮したうえで」という要求である。筆者の見方への賛否が求められている訳ではないし、過去が想起である

か否か、過去は客観的事実であるか否かといったところで論を構えても、説得力のある議論を展開することは難しいだろう（相手は周到に議論を進めており、こちらには極めて限られた字数しかない）。

したがって「過去の体験は、経験を語る物語行為から独立には存在し得ないとする筆者の見方」を踏まえ、どうアプローチするか、を考える。例えば

- (イ) 物語行為が無ければ「過去の体験」は存在しないことになるということについて
- (ロ) 体験が経験へと成熟するということについて
- (ハ) 物語行為とは孤立した体験に脈絡を与え、意味づける反省的な行為ということについて

など、いろいろな論点に絡むことができるだろう。(イ)などは戦争を語り継ぐといった具体的な話題が思い浮かぶし、(ロ)であれば諸君が今身を置いている受験という「体験」を「経験」に「成熟」させることに引きつけて考えても面白い。また(ハ)であれば、最近の短絡的な犯罪や、キレやすい若者などと結び付けてもいいかもしれない。さらに

(ニ) 「過去を語ることについて」という時の「過去」をどう捉えるか

- ① 日本の過去、日本の歴史といった言わば大きな「過去」を考える
- ② 自分自身の過去、自分の体験と経験といった言わば小さな「過去」を考える

など、具体的に考えたい。①についてなら最近の日本の戦後処理問題などを取り上げることでもできようし、「水に流す」日本人のメンタリティと絡めて論じることでもできるだろう。また②であれば、高校受験、学校の部活、友人関係など、それこそ様々な具体的体験および経験が扱えるだろう。



会員番号	
------	--

氏 名	
-----	--